

C—5 農村の住生活にみられる近代化 —動線よりみた台所について—

新潟大 大島 愛子
県立安塚高 ○砂山 和子

1. 農村は都市の住生活に比べて一般に遅れていて、不合理、不衛生、因襲的、封建的面が強いといわれている。これらの遅れが新築住宅においてはどのように改善され、その外観だけでなく、居住機能においても改善されてきたか、それをここでは台所の点から追及した。すなわち、調理作業がいかに機能的、合理的に行なえるようになったかを台所の設備、動作線による作業能率などを新旧両住宅の実態調査から検討した。

2. 調査部落は最近、地震、水害、道路整備などの要因が重なって村の30%が新築された新潟県三島郡三島町七日市とした。

調査時の献立は一定にし、調理者は調査台所を使い慣れている主婦とし、あらかじめ方眼紙に書いておいた台所平面図に調理者の動きをみながら動線として記録した。尚、調理法も一定とするために調理作業を分析し、一定の手順にそって動線を修正し、その結果を比較検討した。

3. 動線総距離は建築年代が新しくなるに従って順次短縮している。その原因は台所面積の縮小と同時に、流し、煮炊台、調味料戸棚など相互の位置が次第に近づいてきたためと思われる。このように農村台所も機能面の近代化が進んできたとはいえ、まだ都市住宅の台所の動線総距離との間には相当の開きがみられる。